

西欧における舞踊記譜法についての言及はトワノ・アルボ(Thoinot Arbeau, 1520-1595)の『オルケゾグラフィ(Orchesographie)』(1589)が祖とされている。以降、18世紀初頭からヨーロッパにおいてラウール＝オージェ・フイエ(Raoul-Auger Feuillet, 1660-1710)の著作『コレオグラフィ、あるいはダンスを記述する技法(Chorégraphie, ou L'art de décrire la danse)』(1700)における記譜法を経て、ルドルフ・フォン・ラバン(Rudolf von Laban, 1879-1958)の記譜理論に至るまで、舞踊記譜は大きな広がりを見せた。今日、ラバンの影響を受け、すでにくつかの論文で、ラバンとの空間認識の相違が指摘されているのが、ウィリアム・フォーサイス(William Forsythe 1949-)の、映像を用いた舞踊譜『インプロヴィゼーション・テクノロジーズ(Improvisation Technologies)』(2000)である。この舞踊譜は、即興のための基本的な考え方を舞踊家に教授するツールである。本編は、身体や空間に点や線、または円や平面を見出すという単純な動作から始まり、それらを身体の様々な部分で動かしたり、それらを空間に措定しその周囲を動いてみたりすることにより、運動を複雑に組み立てるものとなる。

フォーサイスの例にみられるように、舞踊を記録し、教授する方法として今日活躍をみせるものがモーションキャプチャを用いた映像記録である。モーションキャプチャは舞踊家の身体運動を正確に記録し、そのデータを収集、分析する点において有用である。しかしながら、即興のための身体生成のためとはいえ、映像を用いることで、そのイメージからの脱却が困難なものとなり、舞踊家の創作意欲やオリジナリティの欠如が生じてしまうのではないかと発表者は考える。科学技術の発展と共に、本来抽象化、記号化された舞踊記譜の概念があいまいになりつつあるのではないか。そこで本発表では、舞踊の記譜法と呼ばれるものが成立するための条件を再考し、フォーサイスをはじめとする様々な記譜法の特性を明らかにしたのち、今後の舞踊記譜法の可能性を探りたい。舞踊譜も記譜である以上、言語の習得と同様に、譜から身体動作を理解し、具象化する能力と、実際の舞踊を譜で記述し、抽象化する能力が求められる。つまり舞踊家には、舞踊譜から舞踊を導き出し、今度は逆に舞踊から舞踊譜を導き出すといった相互に自在に展開する能力が必要となる。

事例を挙げる中で、我が国の舞踊記譜にも触れておく必要があるだろう。日本の舞踊記譜の歴史を振り返ると、舞踊の伝承においては秘伝的な性格が強く、技法の記号化、普遍化はあまり進まなかったが、近代に入り、東京国立文化財研究所が編纂した『標準日本舞踊譜』(1960)において日本舞踊の体系化の整理が進んだ。すでに多くの論者が指摘するとおり、西洋と日本では舞踊の動きの単位は異なる。こうした舞踊の動きの分節化にも、記譜を再考することは意義深いものとなるであろう。